

今月の聖句

その一羽さえ、神の前で忘れられてはいない。

ルカによる福音書 12：6

その昔私が通っていた高校の近所に火薬店がありました。ライフルを趣味にしている人とか、鳥獣駆除団体の御用達だったのでしょうか。壁には銃が何丁か掛けられ、キジだのイノシシだのの剥製が飾られていました。さすがに食肉を得る目的で狩猟をする個人はいなかったと思うので…それなら撃たれた獣は何に使うの？あ、銃の腕前を披露するのに剥製が欲しいのか。そのとき自分はまたムダな心配をしていました。博物館以外の場所で遭遇したら…万が一ライフルが趣味の人の家に招かれて、アレらが並んで、せっかく自慢なさってるのに自分は何を感じていいのか分からなくて、誉めたり出来ないんだろう…それで《アノ人この剥製ちっとも誉めなかったなァッ》てご期待に沿えないワケだ。今のところ幸いムダになっていて、そんな知人は一人もいません。所変わって宗像は山田川の畔。[リサイクル]とサンルーフには記されているものの、道沿いのショーケースの奥はガラクタ置き場としか呼べず、電化製品、家具、置物…の中では見栄えのする商品だったのか、帳簿を片手に提げたタヌキが立たされていました。多分剥製にする工程で二足歩行の姿勢に加工されたい。ガラスの目玉は小さくてギロリン。飲食店にいる焼き物に比べると胴回りは狭くて、コレを飾ってホコリを払う手間を予測すれば、焼き物かぬいぐるみの方が格段に楽に決まっています。可愛くない上に野生動物の気高さも失われ、コレ持って行く側がお金をもらわなくてはいけないぐらいのシロモノだな…と目にする度に…度に…自分、もしかしてこーゆー存在?!何となく初めから、同情しそうな危うさを感じていました。何かこう有用性の欠落した物品に遭遇すると、そこに自分自身を見るのがクセなんです！それでいて次会うまではキレイに忘れてるんですけど。つまり、ぬいぐるみではなく、正真正銘すばしこくて仕留めるのも一苦勞な獣であったという他にイミはなく、すぐ忘れられる、白紙の帳簿と何も見えない目を持った亡骸である。なんと類似する自分。司祭按手は受けたけど、それはイエス様の愛を十分に実行しているシルシでも何でもなく、両目は視えているけれど人をキチンと視えているのやら。瞬く間に忘れられているだろう説教は真っ白なのと同じで。

不自然な直立タヌキはいつの間にかショーケースから消えていました。神様は小さくて無益なモノも慈しまれるけど、世を去った獣達にはどうなさるのでしょうか？タヌキの亡骸にもどうか憐みを掛け、生きてるタヌキと別のツトメを地上で許してください。そうしたら地上で主の声に応えたい誰も彼もが赦されて生きていけますから。アーメン✠

チャプレン 司祭 セシリア塚本祐子